福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

想像の友情：—Caroline, or Changeにおけるユダヤ人の白人性—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福井大学教育・人文社会系部門 公開日: 2024-04-30 キーワード (Ja): ユダヤ性, 白人性, 人種関係, 公民権運動, ユダヤ系アメリカ文学 キーワード (En): 作成者: 本田, 安都子, Honda, Atsuko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/0002000204

想像の友情

―*Caroline, or Change* におけるユダヤ人の白人性―

本　田　安都子[*1]

内容要約　第二次世界大戦以降、アメリカのユダヤ・コミュニティは、白人としてアメリカ社会に包摂されるようになった。では、ユダヤ人自身は、アメリカの人種関係において自らをどのように位置づけているのだろうか。本稿では、トニー・クシュナーによる戯曲 *Caroline, or Change* を分析対象とし、アメリカの人種関係におけるユダヤ人像が、ユダヤ系アメリカ人作家によってどのように描かれているのか考察する。

キーワード：ユダヤ性・白人性・人種関係・公民権運動・ユダヤ系アメリカ文学

1．不可視化されたユダヤ性

1977 年生まれのユダヤ系アメリカ人作家ダラ・ホーン（Dara Horn）は、エッセイ集 *People Love Dead Jews* (2021) の冒頭で、17 歳の時に彼女が体験したある出来事について語っている。テネシー州ナッシュヴィルで行われた高校生クイズ大会にニュージャージー州から参加したホーンは、ミシシッピ州代表チームの女子学生二人と宿泊先のホテルで同室となった。三人で他愛もないことを話しながら夜を明かすうちに、敬虔なキリスト教徒である南部の女子学生たちがイエス・キリストへの愛について語り始めた。すると、熱心なユダヤ教徒であるホーンは居心地の悪さを感じ始め、黙り込んでしまう。ホーンも当然キリスト教徒であると思いこんでいる二人は、彼女の態度をいぶかしがるものの、北部人は南部人ほど敬虔ではないからだと結論付けようとする。全く見当はずれの指摘であるにもかかわらず、自らの宗教性を棄損されたように感じたホーンは、意を決しユダヤ教徒であることを明かす。すると、彼女たちはホーンの顔を凝視し、ユダヤ人である彼女が金髪碧眼であることに驚きの声を上げ、彼女がユダヤ人であることが信じられないと言う。なぜなら、少女たちのひとりによれば、「ユダヤ人はみな黒い髪と瞳をしているとヒトラーが言っていた」（xiii）からだそうだ。[1]

1990 年代前半に起こったこの出来事は、現在のアメリカの人種関係の中で、アメリカのユダヤ人がどのような問題に直面しているのかについて、興味深い論点を提示している。第一に、ア

[*1]福井大学教育・人文社会系部門教員養成領域

シュケナジー系ユダヤ人に限ったことではあるが、アメリカのユダヤ人は白人としてアメリカ社会に溶け込み、彼らのユダヤ人としての〈違い〉は、多くのアメリカ人には不可視の状態になっているということである。[2]第二に、ヒトラーに関わる女子学生の発言から示唆されるように、アメリカ社会に白人として同化したユダヤ人は、差別の標的となる集団として認識され難いということである。ホーンの体験から、アメリカのユダヤ人を白人として認識する現代のアメリカ社会において、集団としてのユダヤ人の独自性、並びに、ユダヤ人の集団としてのアイデンティティにとって重要な要素と言える被差別の歴史や記憶が不可視化される、という問題が浮上していることがわかる。

上記の体験談は、現代のアメリカのユダヤ人が白人として認識される集団であることを示唆する事例であるが、では、当のユダヤ人たちは、アメリカの人種関係において自らをどのように位置づけているのだろうか。本稿は、その問いの解明の一助となるべく、文学表現において、ユダヤに出自を持つアメリカの作家がどのようなユダヤ人像を描いているのか考察していく。

分析の対象として取り上げるのは、トニー・クシュナー（Tony Kushner）による戯曲 *Caroline, or Change*（以下『キャロライン』と記す）である。この作品は、2003年にオフ・ブロードウェイで初演、そして翌年にはブロードウェイに進出し、2021年には再びブロードウェイで上演されている。物語は、1963年のルイジアナ州の小都市レイクチャールズを舞台に、ユダヤ人一家とそこで働く黒人メイドの間で起こる軋轢や葛藤を描く。レイクチャールズは、クシュナーが2歳から17歳までの時期を過ごした土地であり、物語に登場するユダヤ人一家や黒人メイドは、クシュナー自身や彼の家族、そして彼の家で働いていた黒人メイドをモデルとしている。ゆえにこの戯曲は、クシュナーの自伝的要素を多分に含んだ作品であると言える。

1963年といえば、ワシントン大行進やキング牧師の「私には夢がある」演説に象徴されるように、公民権運動が大きな盛り上がりをみせた年として多くの人に記憶されていることであろう。また同年は、ケネディ大統領がテキサス州ダラスで暗殺された年としても知られている。『キャロライン』は、人種隔離を巡る闘いで揺れるアメリカ社会を背景に、白人として安定した日常を送るユダヤ人一家と、シングルマザーとして出口の見えない経済的苦境に喘ぐ黒人メイドの姿を対比的に描いている。アメリカ社会全体がカラーラインを巡る闘争の渦に飲み込まれる一方、この物語のユダヤ人一家と黒人メイドは、表面上は平和な日常を送っているように見える。しかしながら、小銭（change）を巡ってその平穏は脆くも崩れ去っていく。戯曲の題名の “Change” には、反人種隔離運動によってもたらされようとする〈変革〉と、主人公たちの葛藤の原因となる〈小銭〉という二重の意味が込められている。この物語では、前者とは無関係に見える後者の〈チェンジ〉にまつわる諍いにより、ユダヤ人の家庭に潜むカラーラインの問題が炙り出されていく。

南部ユダヤ人と南部黒人の関係性が主題となっている本戯曲は、内容の観点から本研究の分析対象としてふさわしいというだけでなく、その語られ方においても、先に触れたアメリカの人種関係におけるユダヤ人の問題を想起させるという点で、大変興味深い作品と言える。『キャロライ

ン』の物語上の葛藤を生み出すこととなる小銭を巡る諍いは、ユダヤの祝祭のひとつであるハヌカ（Hanukkah）が遠因となって起こっている。実のところ、ハヌカを祝う場面以外、この物語の主人公である8歳の少年ノアと彼の両親がユダヤ人であることを示唆する要素は、皆無と言っても過言ではない。それどころか、父スチュアートは、息子に向かって「神さまなんていないんだよ」(22) とまで言う。しかしながら、プロットの重要な転換点にハヌカが関わっていることを勘案すれば、この物語にとってユダヤは重要な要素であると見なすべきであろう。しかしながら、『キャロライン』の劇評には、ノアの一家を指して、「ユダヤ人」と「白人」という呼称を混在させているものが少なくない。[3]これらは、ハヌカという明らかにユダヤ人の〈違い〉を表す要素が登場しているにもかかわらず、『キャロライン』について語る評論家の意識の中で、ユダヤ人がユダヤ人ではなく、白人として認識されている、あるいは、「ユダヤ人」と「白人」が交換可能な記号として成立している可能性を示唆する現象と言えるのではないだろうか。

確かに、『キャロライン』は、表面上では、白人と黒人という二つの人種集団の対立という側面が際立つ物語であるのかもしれない。しかしながら、本稿で強調したいのは、白人というアメリカ社会における〈特権者〉の地位を占めるようになったユダヤ人が、どのように自らのユダヤ性と白人性との折り合いをつけることが出来るのだろうか、という問いをこの戯曲は提起しているということである。ユダヤ人にとって、白人として社会に同化することは、一方では、反ユダヤ主義による差別から自由になるという点において望ましいことであるのかもしれない。他方でそれは、歴史的にユダヤ人を迫害し続けてきた側である白人キリスト教徒と自らを同列に置くことを意味し、手放しで受け入れることが難しいことでもある。ゆえに、ユダヤ人にとって〈白人になる〉ということは、何らかの心理的葛藤を生じさせうる問題なのだ。そしてその葛藤は、アメリカ黒人との関係において表面化しやすい。『キャロライン』は、公民権運動を背景としたユダヤ人と黒人の日常を通して、アメリカのユダヤ人が抱える白人性とユダヤ性の相克を描いているという点で、非常にユダヤ的な物語なのだと言える。

２．ユダヤ人と白人性の複雑な関係

アメリカのユダヤ人の白人化に関する歴史研究の嚆矢となった *How Jews Became White Folks* の著者であるカレン・ブロドキン（Karen Brodkin）は、この問題を考えるうえで重要な三つの指摘をしている。ひとつは、ユダヤ人の白人性は不変の絶対的属性ではなく、アメリカ社会の権力中枢に位置する白人と、その対極に追いやられた被差別集団としての黒人との関係性によって、ユダヤ人の白人性が可変するということである。つまり、キリスト教徒によって構成されるアメリカ白人と対峙したときには、ユダヤ人は反ユダヤ主義の標的として排除の対象とされ、彼らの白人性には疑義が突き付けられる。他方、アメリカ黒人と比較された際には、主流アメリカ社会から白人と認識され、その肌の色の白さに準じた特権というものを享受することが可能となる。ブロドキンは、アメリカの人種関係におけるそのようなユダヤ人の立ち位置を指して、「人種的中

間性」(2) と称している。

第二の指摘は、ユダヤ人の白人性は時代によって変化するということである。アメリカ主流社会は、時代によってユダヤ人を排除したり、白人として包摂したりしてきた。ブロドキンは、ユダヤ人が白人としてアメリカ社会に包摂された大きな契機として、第二次世界大戦後に復員兵を対象に施行された数々の連邦援助政策の実施を挙げている。1944年に制定された復員兵援護法により、復員兵たちに教育や就職の機会が優遇的に与えられ、彼らの社会復帰が促された。また、同法による長期の低金利貸付政策により、多くの若い復員兵たちが郊外の住宅を購入することが可能となった。しかしながら、援助法の受益者は白人男性に限定され、黒人男性は援助の恩恵を受けることが出来なかった。つまり、同法の援助対象は、カラーラインによって線引きされていたということである。ユダヤ人は、同法の援助対象として利益を得る側に入れられた。ブロドキンは、第二次世界大戦後に顕著となったユダヤ人の中産階級化は、本人たちの努力も決して無視できない要因ではあるが、復員兵援護法という「アメリカ史における最大規模の優遇措置」(38) によるところも大きいと述べている。[4]

第三に、ユダヤ人自身が自らを白人と見なすかどうか、つまり彼らの人種アイデンティティは、社会が彼らを白人として扱うかどうか、という問題と密接に絡み合って形成されるものの、時として、両者の間には齟齬が生じることもあるということである。[5]例えば、アメリカ社会がユダヤ人を白人として扱っても、当のユダヤ人には自分が白人であるという意識がないということもありうる。これは、それぞれのユダヤ人が有する排除の記憶――それは個人的な体験の記憶のみならず、先祖から継承された集団的記憶の場合もある――の如何により、自らの人種アイデンティティをどう捉えるかに違いが生じるためである。よって、ユダヤ人の集団内でも、例えば、世代によって人種アイデンティティが異なることもありうる。ブロドキンは自らの家族を具体例に、以下のように説明している。反ユダヤ主義が蔓延っていた戦前期に子ども時代を送った彼女の両親は自身を白人とは認識せず、戦後においてもユダヤ人という意識しか有していない。他方、戦後に郊外の中産階級的環境で育ったブロドキンは、自身をユダヤ人であり、且つ、白人でもあると認識していると述べている (2-3)。

上記の三点に共通しているのは、アメリカのユダヤ人の白人性は固定的ではない、ということである。ユダヤ人の排除や包摂に関わる時代の趨勢や、どの人種集団と比較するのか、そして、どのような被差別の体験や記憶を有しているのかなど、ユダヤ人の白人性に影響を及ぼす要因がいくつも存在する。肌の色などの身体的特徴によって一律に決定されるという単純な問題では決してなく、社会情勢やユダヤ人個々人の体験や信念によっても異なる複雑な事象なのだと言える。

3．クシュナーと白人性

それでは、『キャロライン』の作者であるクシュナーは、自らの白人性をどのように捉えているのだろうか。インタビューなどにおける発言から推察されるのは、彼の白人としてのアイデン

ティティは、ユダヤ人としての出自と深く絡み合っているということである。

1956年生まれのクシュナーは、ユダヤ人が白人としてアメリカ社会に包摂された戦後世代のユダヤ人である。ゆえにとも言うべきか、彼は自らを白人作家と公言している。例えば、1997年の『ニューヨーク・タイムズ』紙の記事において、自作の戯曲で黒人登場人物を描く際の葛藤について、次のように述べている。「白人作家として、黒人の登場人物を描く場合、いくつか問題が生じることになります。なぜなら、カラーラインの誤った側からその人物を描くことになるわけですからね」（Gold）。これは、まさに『キャロライン』を執筆した際に、クシュナーを悩ませた問題であった。あるインタビューにおいてクシュナーは、『キャロライン』の黒人登場人物の台詞を書く際に、それらがミンストレルの台詞のように聞こえないかどうか不安に感じ、黒人メイドのモデルであるモーディー・リー・デイビス（Maudie Lee Davis）に原稿を読んでもらい、彼女から好評をもらうまでは安心できなかったと告白している（Rothstein）。

しかしながら、クシュナーが自らの白人性を無条件に受け入れているかというと、そうでもないことが彼のユダヤ性に関する発言から読み取ることが出来る。1994年に行われたアメリカの作家マイケル・カニンガム（Michael Cunningham）との対話の中で、カニンガムから、単なる〈作家〉ではなく〈ゲイ作家〉と呼ばれることに飽き飽きしないかと聞かれた際、クシュナーは、自らの性的指向や出自が作品から滲み出ていると観客に思われることを歓迎し、むしろ、〈ゲイ作家〉や〈ユダヤ人作家〉とみなされたいと語っている（Vorlicky 69）。この会話から、クシュナーにとってユダヤ人であることは、彼のアイデンティティの重要な一部であることが確認される。

しかしながら、ユダヤ人がアメリカ社会に白人として同化することが容易となった、つまり、キリスト教徒である他のアメリカ白人と区別がつかない存在として包摂された現代において、ユダヤ人とはどのような集団であるのか明確に定義づけることは難しい。この点について、1994年のインタビューの中で、クシュナーは次のように語っている。「現在、私たちのことをどう呼べばいいか、言葉につまりますね。つまり、私たちは宗教的集団とは言えず、また、ユダヤ人自身も含め、誰もがユダヤ人を人種集団として見なすことには抵抗がありますよね。私たちは、近代が生み出した最も奇妙な現象とでも言えばよいでしょうか」（Vorlicky 82-83）。さらに、この「最も奇妙な現象」に関連して、クシュナーは翌年のインタビューにおいて、「ユダヤ人であるということは、抑圧と迫害の歴史の元に、そして、様々な時代おいて、ユダヤ人にユダヤ人であることをやめることを条件に同化できるという、ありもしない可能性をちらつかせてきた歴史の元に生まれるということです」（Vorlicky 217-18）とも述べている。これらの発言から読み取れるのは、クシュナーは、アメリカ主流社会への同化、つまり、ユダヤ人が白人としてアメリカ社会に安住する可能性には懐疑的な見方をしており、手放しで自らに賦与された白人性というものを受け入れているわけではないということである。白人性に対するこのような態度から、ユダヤ人の迫害の歴史を重く受け止めるクシュナーの姿勢を垣間見ることができる。

ユダヤ人の白人性、あるいは同化に対して懐疑的である一方、クシュナーは、たとえそれが仮初

のものだとしても、白人として包摂されたユダヤ人に与えられた特権を軽視してはいない。ゆえにクシュナーは、先に引用した1997年の『ニューヨーク・タイムズ』紙の記事の中で、ユダヤ人作家としてではなく、白人作家として黒人を描く不安について語ったのであろう。ブロドキンが指摘するように、ユダヤ人の白人性が比較対象によって可変するものであるのならば、ユダヤ人は、他のアメリカ白人との比較では、いつなんどき反ユダヤ主義による迫害の対象になりかねないという不安定な立場に置かれる一方、黒人と比べた場合、より多くの自由や特権が保障されうる立場に身を置くことができる。クシュナー曰く、肌の色を根拠に被抑圧者の烙印を押されたアメリカ黒人には、ユダヤ人に約束されたような同化の可能性すら望むことができない（Vorlicky 218）。共に被差別の歴史を背負った集団でありつつも、現代のアメリカのユダヤ人と黒人がそれぞれ置かれた立場には、厳然とした非対称性が存在することを、クシュナーは認識しているのであろう。

４．南部ユダヤ人と同化の代償

前節において確認されたユダヤ人の白人性に対するクシュナーの態度――肌の色を担保に約束された同化の可能性への懐疑、および肌の色によって賦与された特権を得たことにより生じる黒人との非対称な関係性の認識――は、『キャロライン』のユダヤ人登場人物の言動にその影響が見て取れる。この節では、クシュナーが抱く同化の可能性への懐疑が作品内でどのように表れているのか検討する。

『キャロライン』において、ユダヤ人のアメリカ社会への同化が最も楽観的に語られているのが、父方と母方両方の祖父母たちと一緒にノア一家が祝うハヌカの場面である。その冒頭において祖父母たちは、ハヌカを祝う際に歌われる定番曲「オー・ハヌカ（Oh Hanukkah）」の調べに乗って、次のような台詞を述べる。「すべての生き残ったユダヤ人が、／…歌うよ おめでとう ハヌカと、／とりわけアメリカにおいて！」（82）。その直後、突如として曲調がアメリカの愛国歌「美しきアメリカ（America the Beautiful）」に切り替わり、右手を左胸に添えて、その歌詞の一節「アメリカ アメリカ 神が汝に恩恵を与えたまう」（82）と歌いだす。ヘリーン・マイアーズ（Helene Meyers）は、上記の「すべての生き残ったユダヤ人が」という一節が、ホロコーストを想起させるとの指摘をし、祖父母たちにとって、アメリカこそがユダヤ人が繁栄を望める土地であることが示唆されていると述べる（139）。また、ハヌカの歌がアメリカの愛国歌と継ぎ目なくひとつづきに歌われることにより、ユダヤ人であることとアメリカ人であることが相反することではなく、このふたつは共存可能であると祖父母たちは主張しようとしているようにも聞こえる。それは、アメリカ人として包摂されても、ユダヤ人としての〈違い〉を保ったままでいられるのだという、多分に楽観的な同化観と言える。

しかしながら、そのような同化観は、物語の時代設定を考慮に入れれば、十分に現実味を帯びた主張でもある。アメリカでは、1940年代あたりから、キリスト教とユダヤ教の間の差異を、国家

の一体感を揺るがすような脅威と見なす考え方は影を潜め、宗教的多様性を喧伝する世論が形成されるようになった（Goldstein 206）。例えば、1945年に制作された短編映画『私が住む家（*The House I Live in*）』では、歌手のフランク・シナトラ（Frank Sinatra）が、ユダヤ人の少年をいじめるキリスト教徒の白人少年たちに、宗教的寛容こそアメリカの信条なのだと教え諭す。アメリカの寛容さをナチの偏狭さと対比して語るシナトラは、少年たちに「君たちはナチなのかい？」と問いかける。さらに彼は、話し方や宗教など、様々な点において異なる人々で成り立っているのがアメリカという国なのだと述べる。まさに、アメリカが国是として掲げる「多からなる一つ」についてシナトラは説いているのだ。[6]『キャロライン』では、ノアの祖母が「（ハヌカは）クリスマスよりも7日も長くお祝いするのよ！」（82）と、キリスト教とユダヤ教の違いは、祝い事の長さの違いでしかないかのように高らかに歌い上げる。ふたつの宗教が並列的に語られることにより、キリスト教社会における異邦人であったユダヤ人は、アメリカを形作る多種多様な要素のひとつとして、安定的地位を手に入れたと言っているかのようである。

このように、ハヌカの場面では、アメリカのユダヤ人の同化が肯定的に語られるのだが、同時に、ユダヤ人のアメリカ社会への包摂は、無条件でなされるわけではないことが示唆されるやり取りも展開されている。労働運動の活動家という背景を持つ母方の祖父ストップニックは、「古い世界が終わりつつある！／黒人が行進している！／変革が訪れるのだ！／薄汚い資本家の豚どもの終焉だ！」（84）と叫び、さらには、黒人たちは非暴力主義をやめ、もっと過激になれと扇動的な言葉を吐く。すると、南部出身の父方の祖父母は、「そんな大それたことは恐ろしい！／ルイジアナの黒人は／ミシシッピの黒人とは違うし、／アラバマの黒人のように狂っちゃいない」（85）と応答する。さらには、「まったく、これが／ハヌカの初日に話すことかい？／嫌なことをくどくど話すことはやめにしよう！」（85）と、南部の人種隔離や公民権運動から目を背けようとする。

実際に、このような人種差別問題を巡るユダヤ・コミュニティ内部での意見の対立は、北部のユダヤ人が公民権運動に積極的に参加するようになるにつれ、際立つようになっていった。ニューヨークなど、ユダヤ人人口の多い北部と異なり、南部においてユダヤ人は圧倒的な少数派であり、且つ、南部では北部よりも遥かに人種差別が苛烈であった。ゆえに、そのような環境下で南部ユダヤ人が安寧を得るには、既存の人種秩序に異議を唱えることは決して得策ではなかった（Forman 33-35; Goldstein 199-200）。実際に、1957年から58年にかけて南部各地でシナゴーグ爆破事件が相次ぎ、ユダヤ人たちの間では、反隔離運動に従事する北部ユダヤ人を中心とするリベラル派ユダヤ人への白人至上主義者たちによる報復であるとの意見が大勢であった（Dinnerstein 190; Forman 44-45）。1915年にジョージア州アトランタで起こったレオ・フランク（Leo Frank）のリンチ事件以来、同様の反ユダヤ主義的暴力事件が再び起こるのではないかという不安と隣り合わせであった南部ユダヤ人たちにとって、ストップニックのような北部ユダヤ人は、まさに寝た子を起こすような厄介者と言えよう。

『キャロライン』のハヌカの場面は、アメリカのユダヤ人の同化について何を語っているのだろ

うか。ひとつには、戦後のアメリカにおけるユダヤ人の白人としての特権性は、白人主流社会との関係性に左右されうる脆いものだということである。それは、人種隔離を巡って揺れる1960年代の南部が物語の舞台とされることによって効果的に表現されている。また、ひとつの場面の中で、宗教的多様性という国家理念の下で、集団としての存続が可能になったと喜ぶユダヤ人の姿と、カラーラインによって統制されるアメリカの人種秩序への恭順、つまり、白人キリスト教徒の振舞いを真似ることを強いられるユダヤ人の姿を同時に描くことにより、ユダヤ人にとって、アメリカ社会に同化するということは何を意味しているのか、この戯曲を見る者に考えを促すような構成になっている。

他方で、アメリカのユダヤ人の同化には手痛い代償が伴うということも、ハヌカの場面で暗示されている。ハヌカの歌の調べに乗って『キャロライン』のユダヤ人たちは、ホロコースト後のユダヤ人が安住できる地として、アメリカという国を称揚する。彼らは、ヨーロッパでの迫害の歴史を踏まえたうえで、アメリカをユダヤ人の〈約束の地〉として語っているのだが、その行為には、自らの迫害からの解放を喜びながらも、他の集団が被っている迫害からは目を背けるという、ある種の欺瞞が内包されている。「嫌なことをくどくど話すことはやめにしよう！」(85) という台詞に象徴されるように、『キャロライン』の南部ユダヤ人が示しているのは、集団としてのユダヤ人の迫害の記憶を目の前にある人種差別の現実から切り離そうとする、一種の思考停止の態度と言えよう。クシュナーがインタビュー等で語っているように、迫害の集団的記憶というものがユダヤ人がユダヤ人であるために重要な要素であるのならば、そのような思考停止は、白人性と引き換えにユダヤ性を手放す行為とも言えるのではないだろうか。

5．ノアの友情

この節では、ユダヤ人の白人性に対するクシュナーの態度のもう一つの側面である、ユダヤ人と黒人の非対称な関係性の認識が、『キャロライン』にどのように表れているのか検討するため、主人公ノアと、彼の家でメイドとして働く黒人女性キャロラインの〈友情〉について考察する。

『キャロライン』における物語上の起伏を形作っているノアとキャロラインの葛藤は、ハヌカを遠因として引き起こされる。ノアが祖父からもらったハヌカの贈り物である20ドルを巡ってふたりは対立し、その関係が修復することなく物語は幕を閉じる。事の始まりは、教育の一環としてノアの継母ローズが課した新たな決まり事であった。小遣いの小銭をぞんざいに扱うノアに手を焼いていたローズは、小銭をズボンのポケットに入れたまま洗濯に出した場合、その小銭はキャロラインのものになるというルールを定める。子どもから小遣いを取り上げるような真似はしたくないと、初めはローズに従うことに躊躇していたキャロラインであったが、週30ドルの賃金では子どもたちに満足のいく暮らしをさせてやれないため、ローズの〈指導〉に渋々ながら付き合うことになる。大人たちの苦労をよそに、いつまでたっても悪癖をやめられないノアは、ハヌカの20ドルをポケットに入れたまま洗濯に出してしまう。そして、20ドルの所有権を巡り、それま

で母のように慕っていたキャロラインと大喧嘩をすることになる。互いに差別的な暴言を吐いた後、キャロラインはノアの家を去る。結局、数日してメイドとして復帰するものの、「また僕たち友だちになれる？」（123）というノアの問いに、キャロラインは「友達だったことなんてないわよ」（123）と冷たく返事をし、彼らの〈友情〉の物語は終わりを迎える。

従来、アメリカにおけるユダヤ人と黒人の関係が語られる際、共に迫害の歴史を有する集団として両者の類似性を強調する言説が散見される。例えば、1948年のエッセイの中で、ジェームズ・ボールドウィン（James Baldwin）は、『出エジプト記』のユダヤ人に自らの姿を重ね、モーセのような存在の導きによってエジプトから脱出する日を待ちわびる敬虔な黒人キリスト教徒の存在について述べている（“The Harlem Ghetto”）。また、ジャック・サルツマン（Jack Salzman）は、公民権運動期を頂点とするユダヤ人と黒人の協力関係の歴史を紐解く言説の中でよくなされていたのが、ユダヤ人と黒人は、「両民族の歴史を特徴づける隷属の遺産によって繋がっている」から共闘できたのだという説明であると指摘する（1）。アメリカのユダヤ人と黒人の反差別運動における共闘関係は、1909年の全米黒人地位向上協会の設立を起点にして始まったとされているが（Johnson and Berlinerblau 29）、レオ・フランクのリンチ事件があった1915年を境にして、ユダヤ人たちは反人種差別運動に特に注力し出したと言われている。高学歴で成功したビジネスマンであったフランクが、黒人の証言によって極刑の判決を下されたばかりか、リンチという無残な末路を辿ることになったこの事件の背景には、南部の反ユダヤ主義による司法の歪みがあったのではないかと多くのユダヤ人が疑ったからである（Lewis 547）。

このように、ユダヤ人と黒人は、迫害の歴史という共通項によって結ばれた集団として語られることが多いのだが、そのような見方に対する反証や反対意見も数多くある。例えば、レオ・フランク事件に関して言えば、ユダヤ人と黒人が共闘して南部の人種差別と闘うべきだという声が一部にあったものの、ユダヤ系と黒人系の新聞メディアによる裁判報道では、互いの陣営に対する攻撃合戦が繰り広げられた。ユダヤ系の新聞は人種差別的な文言を使って、判決の決め手とされたジェームズ・コンリー（James Conley）の証言の信憑性を下げようとし、黒人系の新聞は、そのような報道によってユダヤ人は黒人差別を意図的に煽っていると非難した。また、黒人系新聞の中には、抵抗するすべもなく日常的にリンチの恐怖に晒され続ける黒人と、たった一人の被告を救うために多大な人的・経済的支援を注ぐことのできるユダヤ人という対比によって、両集団の違いを強調する論調も見られた（Levy 264-67）。ボールドウィンは、アメリカにおけるユダヤ人と黒人の根本的な違いに目を向けず、両者の類似性のみを主張する声に対し、次のような痛烈な批判をしている。

> 確かに、多くのユダヤ人は、恥ずかしげもなく、第三帝国による600万人の虐殺を根拠に、自分たちの偏見を否定したり、その責任を免れようとしたりする。…端的に言って、アメリカのユダヤ人たちに、彼らがアメリカ黒人の苦難と同じだけの苦しみを被っているなどと言

われたくない。…ユダヤ人の受難は海の向こうで起こったことであり、アメリカは彼らを隷属から救った。しかし、黒人にとって、アメリカこそが自らを隷属させている国であり、黒人を救ってくれる国はどこにもない。ここ［アメリカ］で黒人に起こっていることは、彼がアメリカ人であるがゆえに起こっていることなのだ。(“Negroes Are Anti-Semitic Because They're Anti-White” 741-45)

ボールドウィンは、ヨーロッパにおけるユダヤ人の受難そのものを否定しているのではない。彼の批判の矛先は、アメリカの人種秩序における自らの特権性に無自覚なままで、自らと黒人を比較しようとするユダヤ人の態度にこそ向けられているのだ。要するに、ボールドウィンが問うているのは、ユダヤ人が白人性とどのように向き合っているのか、という問題なのである。

アメリカのユダヤ人と黒人の関係性に関するこれらの言説を踏まえたうえで、『キャロライン』におけるユダヤ人と黒人の関係性に関する描写を見てみると、ユダヤ人と黒人の登場人物たちの状況認識が驚くほど異なることに気づかされる。例えば、ケネディ暗殺の報を受け、ノアの南部の祖父母たちは、次のようにケネディの功績を称える。「JFK、JFK、／ロシア人をやっつけて、難局を乗り切り、／ユダヤ嫌いの奴らを押しとどめて、ミサイル攻撃を阻止し、／奴らの核ポグロムを食い止めた。／無力化する努力をしてくれた／アメリカの反ユダヤ主義者を！／黒人の友だち、ユダヤ人の友だち」(39)。その直後、キャロラインの友人である黒人女性ドティが、黒人の視点からケネディを次のように評する。「JFK、JFK、／いつか黒人を助けてくれると誓った。／確かに少し時間がかかった／そうするまでに、／だけど彼は誓いを立て、私は分かっていた／私たちの運動の手助けに乗り出し、／しかるべき法律を通そうとしていたことを。／…私たちのほぼ友だちはもういない」(39-40)。祖父母とドティは、共にケネディのことを反差別の大統領として認識しているものの、祖父母がケネディの行ったとされることを評したのに対し、ドティの評価は、大統領の意図に対してのみである。ゆえに彼女は、ケネディのことを、黒人にとって友だちに近い存在と呼ぶにとどめている。両者のケネディに対する評価の違いにより、アメリカにおけるユダヤ人と黒人の問題に対してケネディが何をしたのか、あるいはしなかったのかが示唆されている。また、祖父母が「黒人の友だち、ユダヤ人の友だち」(39) と、ふたつの集団を並列的に語っている点も注目に値する。ケネディによって救われたユダヤ人と、口約束だけをされた黒人、という処遇の差異に目を向けることなく、ふたつの集団を〈被差別集団〉として並列的に語る祖父母の状況認識は、ドティとは大きく異なることが浮き彫りになっている。

同様に、北部出身のリベラル派であるストップニックの言動においても、黒人登場人物たちとの状況認識の差が際立つ。ハヌカの場面で、母キャロラインの仕事の手伝いに来ていた娘エミーに対し、老人は、キング牧師の非暴力は有効な手段ではないと説く。それに対しエミーは、「これは黒人の問題です、／南部の問題です、／キリスト教徒の問題です」(90) と言い、一線を引こうとする。するとストップニックは、彼女にホロコーストの教訓を教え諭そうとする。「ああ、ユ

ダヤ人も非暴力になれるさ／ユダヤ人より従順な者はいないからな！／お嬢さん、聞きなさい、我々は学んだのだよ／非暴力じゃ焼き殺されてしまうとね」(90)。そして最終的には、「分からないことがあるものか、／白人だろうと、ユダヤ人だろうと、黒人だろうと／もし支配者に顔を踏みつけられたら／どうする？涙を流すか？／そこに横たわったままでいるのか？／その顔が足のせ台でないことは分かっているだろう／宗教や人種に関わらず！」(91) と、差別問題には人種や宗教の別などないのだと言い放つ。このやり取りは、キャロラインがエミーを叱責することで収束するが、自らに非はないことを主張する娘をキャロラインは次のように叱る。「ああ、あたしは娘を甘やかして育ててしまった。／あのひとたちは主人で、お前は女王様じゃないんだ！／ひっぱたかれてしまうよ／白人に向かってあんな生意気な口をきいたら」(92)。他方、ストップニックは、「南部にやって来て／初めて本音の会話が出来たよ」(91) と言い、エミーとのやり取りをいたく気に入った様子を見せる。

この場面における一連のやり取りでも、やはり、ユダヤ人による黒人問題へのある種の無理解が露になっている。南部の祖父母と同様に、ストップニックもユダヤ人の被差別体験を黒人のそれと同列に語る。さらに、ストップニックは、差別問題に人種や宗教の違いは関係ないとまで述べている。加えて、この場面では、ストップニックとエミーの地位の違いにも言及されていることが重要である。どれほどストップニックが差別問題に関心を持ち、自ら被差別集団の一員を自認していようとも、彼は権力を行使しうる側の人間であり、キャロラインの台詞に示唆されているように、黒人から見れば、彼は特権を持った白人なのである。まさに、己の白人性に無自覚なリベラル派ユダヤ人の姿がストップニックを通して描かれている。

興味深いことに、ユダヤ人が白人としてアメリカ社会に包摂された戦後世代に属するノアは、自らの白人性に無自覚な祖父母たち戦前世代を戯画化したような態度でキャロラインに接する。8歳のノアは、子どもゆえの無知を勘案しても無理があるほどの現実離れをした妄想を、キャロラインに対して抱いている。彼の心の中でキャロラインは、この世の最高権力者なのである。「僕らのメイド キャロライン！／…キャロライン アメリカ大統領！／いつも機嫌の悪いキャロライン、／すべてを支配しているキャロライン、／僕のパパより強いキャロライン」(14)。さらには、ケネディ暗殺の報が知れ渡った後、ノアは、「今や君が唯一の大統領だよ／アメリカの！」(45) とキャロラインに呼びかける。

子どもらしく、突拍子もないノアの言葉への応答として、キャロラインは、自分が大統領だったら実現したい法律を列挙していく。一日の重労働の後、唯一ひとりで静かな時間を過ごせる夜の時間を長くする法律、ベトナム戦争で派兵されている長男を連れ戻す法律、自分のようにいつまでも薄給で働かずに済むように、女子教育を充実させる法律、そして、娘のエミーが、自分の生きたい人生を生きられるようにする法律(45)。これらキャロラインの架空の法律には、自らの経済状況や国の政策に左右され、自力ではどうしようもない彼女の苦境が反映されている。

そもそも、キャロラインが女手ひとつで子どもたちを養っているのは、彼女の元夫が被った人

種差別が原因であったことが語られている。第二次世界大戦終結後、黒人の復員兵として戦地から戻った夫が職を見つけるのは困難であった。やがて酒におぼれ暴力をふるうようになった夫に代わり、キャロラインがメイドとして家計を支えるようになるが、夫はキャロラインと子どもたちの元を去ってしまう(71-74)。このようなキャロラインの苦難が明らかになっていくにつれ、初めは無邪気に聞こえていたノアのキャロラインに対する愛着が、無理解と不条理に満ちた妄執のように聞こえるようになっていく。

ノアのキャロラインに対する異常なまでの執着には、彼が抱える喪失感が関わっている。ノアは、キャロラインが仕事をしている地下室に日参し、彼女の休憩時の煙草の火をつけることを日課としている。少年に対して特に優しくした覚えのないキャロラインは、なぜここまで懐かれるのかが分からず、その理由を尋ねる。するとノアは、肺癌で亡くなった母がキャロラインを気に入っていたからだと言い、そして、母を亡くした喪失感や悲しみゆえに、いつもネガティブな感情しか示さないキャロラインに共感していることを伝える。「僕のママが君のことを好きだったんだ！／僕もだよ！／君は頑固で／へこたれない人だってママが言ってたよ。／僕、寂しいんだ。／いつも怒っている君が好きなんだ。／君も僕のことが好きなのは分かってるよ。／少なくとも僕にはそう思えるんだ」(46)。

ノアの母がヘビースモーカーであり、且つ、肺癌で亡くなっていることは、ノアの喪失に興味深い要素を加えている。物語の設定年の翌年あたる1964年、公衆衛生局長官報告において、喫煙がもたらしうる甚大な健康被害の可能性が公表されたことにより、喫煙に対する人々の意識が大きく変わることとなった。[7] しかしながら、この報告があと数年でも早くなされていれば、ノアの母が命を落とすことはなかったのかもしれない。キャロラインの苦難とは比較可能なものではないが、ノアもまた、自己の力ではどうにもならない悲劇を体験しているという点において、このふたりには、互いの苦しみに共感できる可能性がわずかながらにあることが、物語の前半で暗示されている。

しかし、継母ローズが課した小銭のルールにより、そのような可能性など一瞬のうちに消し飛んでしまう。自分のものである筈の20ドルをキャロラインに〈奪われる〉ことに腹を立てたノアは、キャロライン個人ではなく、黒人全体を貶める発言をする。「ジョンソン大統領は爆弾を作ったんだ／黒人を皆殺しにするためだけにね！／お前なんか大嫌い、大嫌い、黒人はみんな死んじゃえ！ほんとだよ！うそじゃないよ！／お前の上に爆弾が落ちればいいんだ！」(104)。

ノアがキャロラインに対して抱いていた友情とは、一体、何だったのだろうか。少年は、キャロラインの抱える苦しみや悲しみの影を、彼女の表情や態度から感じ取ってはいた。しかしながら、観客には明かされたキャロラインの苦難の人生は、幼いノアの知るところではない。ローズは、ノアが金銭管理能力をつけることのみならず、キャロラインとの経済格差を意識することも期待してあのルールを課したようだが、結果は逆効果であった。継母ローズの教育は、失敗に終わったと言えよう。

しかし、ノアは物語の終盤で、キャロラインから重要な教えを授けられる。キャロラインは、ノアとの友情の存在は否定したが、代わりに、ふたりの新たな関係性を提案する。「ノア、いつか私たちがもう一度おしゃべりする時が来るわ／だけど、私たちが話さないこともあるの。／あなたが心の奥深くに抱えるあの悲しみ、／私にもあるわ、／そして、悲しみは決して消えないものよ。／あなたは大丈夫。／いつか、手放し方を身に付けるでしょうよ」(124)。キャロラインは、自分とノアにはそれぞれの悲しみがあることを認めている。しかしながら、その悲しみは簡単に言葉にしたり、相手に伝えたりできるものではない。安易な共感の可能性には、懐疑的なのであろう。互いの悲劇の存在を認知しながらも、軽々に相手の領域を侵犯しないという態度は、ストップニックに象徴されるような、他者の悲劇を我がことであるかのように語ろうとする姿勢とは大きく異なる。この引用におけるキャロラインの言葉は、祖父母たちのやり方とは異なる、悲劇との新たな付き合い方をノアに伝えようとしているかに聞こえる。

キャロラインが言うように、彼女とノアの間には初めから友情関係などなく、そこにあったのは、勝手な妄想を投影できる黒人女性に対する、ユダヤ人少年の一方的な執着だけであったのかもしれない。だが、ノアの一家にとってはたったの20ドル、しかし、キャロラインにとっては救いの20ドルによって、少年が抱いていた想像の友情は脆くも砕け散った。キャロラインの教えによって、ノアがどこへ導かれるのかは描かれずに物語は幕を閉じる。あえて閉じた結論を避けることによって、クシュナーは、1963年の地点まで戻って、従来の歴史に刻まれたものとは異なるアメリカのユダヤ人と黒人の関係性の在り方について、そして、ユダヤ人が、自身のユダヤ性と白人性との間の折り合いをどのようにつけうるのかについて、あらゆる可能性に思いを巡らせることを観客に期待しているのかもしれない。

＊本研究はJSPS科研費（課題番号22K00424）の助成を受けたものです。

註

[1] 本稿における和訳は、すべて執筆者によるものである。

[2] アシュケナジー系ユダヤ人が白人としてアメリカ社会に認知されるようになり、彼らのユダヤ性が不可視の状態とされる問題と同時に、アメリカ社会において、少数ではあるが確実に存在する有色人種のユダヤ人の存在も不可視化させるという問題も生じている。後者の問題に関しては、Brettschneider、Kaye/KantrowitzおよびInyを参照のこと。尚、本稿においては、議論の関係上、主にアシュケナジー系ユダヤ人を念頭に置いて、「ユダヤ人」あるいは「アメリカのユダヤ人」という語を使用していることを付記する。

[3] 該当する劇評の例としては、R. Goldstein、Green、PrescodおよびScottを参照のこと。

[4] エリック・L・ゴールドスタイン（Eric L. Goldstein）は、第二次世界大戦下、ヨーロッパにルーツを持つ国民間の分断が生ずることを恐れたローズベルト政権によって、ユダヤ人をはじめとするヨーロッパ系移民を〈白人〉として優遇し包摂する政策が実施されたことを指摘している（190-94）。

[5] 北美幸は、「処遇」と「意識」という用語を使って、ユダヤ人の白人化の変遷を論じている。ユダヤ人の白人化の可変性は、公民権運動に対する南部と北部のユダヤ人の態度の違いに端的に表れているように、地理的な要素

によっても左右されることを同氏は指摘している（274-78）。

[6] この短編映画は、宗教的違いを越えた〈白人〉による団結が、アメリカという国家の一体感を作り出すという考えを説いているのだが、その結束は、有色人種の排除によって可能となっているのは言うまでもない。ここに登場する子どもたちは、ユダヤ人を含めた白人の子どものみであり、黒人などの有色人種の子どもは含まれていない。また、戦時貢献をした愛国者としてユダヤ人を語る際、シナトラはパール・ハーバーに言及し、キリスト教徒とユダヤ教徒の兵士の乗った戦闘機が「ジャップ」の戦艦を爆撃したのだと誇らしげに語るのだが、シナトラの愛国的兵士の物語には、日系アメリカ人兵士で構成された442部隊が含まれることはない。

[7] ギャラップ調査によれば、喫煙を肺癌の原因の一つと見なす回答者の割合は、1950年代後半には4割から5割を推移していたが、1964年の公衆衛生局長官報告後初の調査年である1969年には7割にまで増加している（“Tobacco and Smoking”）。

参照文献

Baldwin, James. “The Harlem Ghetto.” *The Commentary*, February 1948, commentary.org/articles/james-baldwin/from-the-american-scene-the-harlem-ghetto-winter-1948/. Accessed 1 October 2023.

---. “Negroes Are Anti-Semitic Because They’re Anti-White.” 1967. *Collected Essays*, edited by Toni Morrison, the Library of America, 1998, pp. 739-48.

Brettschneider, Marla. *The Family Flamboyant: Race Politics, Queer Families, Jewish Lives*. SUNY Press, 2012.

Brodkin, Karen. *How Jews Became White Folks and What That Says about Race in America*. Rutgers UP, 1998.

Dinnerstein, Leonard. *Antisemitism in America*. Oxford UP, 1994.

Forman, Seth. *Blacks in the Jewish Mind: A Crisis of Liberalism*. NYU Press, 1998.

Gold, Sylviane. “Seeking a Theater Varied as a Rainbow.” *The New York Times*, 23 February 1997, nytimes.com/1997/02/23/theater/seeking-a-theater-varied-as-a-rainbow.html. Accessed 1 October 2023.

Goldstein, Eric L. *The Price of Whiteness: Jews, Race, and American Identity*. Princeton UP, 2006.

Goldstein, Richard. “Angels in a Changed America.” *The Village Voice*, 25 November 2003, villagevoice.com/angels-in-a-changed-america/. Accessed 1 October 2023.

Green, Jesse. “Review: ‘Caroline, or Change’ Makes History’s Heartbreak Sing.” *The New York Times*, 27 October 2021, nytimes.com/2021/10/27/theater/caroline-or-change-review.html. Accessed 1 October, 2023.

Horn, Dara. *People Love Dead Jews: Reports from a Haunted Present*. WW Norton, 2021.

Iny, Julie. “Ashkenazi Eyes.” *The Flying Camel: Essays on Identity by Women of North African and Middle Eastern Jewish Heritage*, edited by Loolwa Khazzoom, Seal, 2003, pp. 81-100.

Johnson, Terrence L. and Jacques Berlinerblau. *Blacks and Jews in America: An Invitation to Dialogue*. Georgetown UP, 2022.

Kaye/Kantrowitz, Melanie. *The Colors of Jews: Racial Politics and Radical Diasporism*. Indiana UP, 2007.

Kushner, Tony. *Caroline, or Change: A Musical*. Nick Hern, 2018.

Levy, Eugene. “‘Is the Jew a White Man?’: Press Reaction to the Leo Frank Case, 1913-1915.” *Strangers and Neighbors: Relations between Blacks and Jews in the United States*, edited by Maurianne Adams and John Bracey, U of Massachusetts P, 1999, pp. 261-70.

Lewis, David Levering. “Parallels and Divergences: Assimilationist Strategies of Afro-American and Jewish Elites from 1910 to the Early 1930s.” *The Journal of American History*, vol. 71, no. 3, 1984, pp. 543-564.

Meyers, Helene. *Identity Papers: Contemporary Narratives of American Jewishness*. SUNY P, 2011.

Prescod, Ayanna. "'Caroline, or Change' Review: Broadway Revival Starring Sharon D Clarke Is Timely and Necessary." *The Variety*, 27 October 2021, variety.com/2021/legit/reviews/caroline-or-change-review-broadway-sharon-d-clarke-1235098905/. Accessed 1 October, 2023.

Rothstein, Mervyn. "How Tony Kushner Changed 'West Side Story' and 'Change' Itself." *The Forward*, 16 November 2021, forward.com/culture/478209/tony-kushner-caroline-or-change-west-side-story-angels-in-america-jewish/. Accessed 1 October, 2023.

Salzman, Jack. "Introduction." *Struggles in the Promised Land: Toward a History of Black-Jewish Relations in the United States*, edited by Jack Salzman and Cornel West, Oxford UP, 1997, pp. 1-19.

Sinatra, Frank. *The House I Live In*. 1945. *The Library of Congress*, loc.gov/item/mbrs00009167/. Accessed 1 October 2023.

Scott, A. O. "Tony Kushner, Oracle of the Upper West Side." *The New York Times*, 30 November, 2021, nytimes.com/2021/11/30/t-magazine/tony-kushner-caroline-west-side.html. Accessed 1 October, 2023.

"Tobacco and Smoking." *Gallup*, news.gallup.com/poll/1717/Tobacco-Smoking.aspx. Accessed 1 October 2023.

Vorlicky, Robert, editor. *Tony Kushner in Conversation*. U of Michigan P, 1997.

北美幸「『白人性』議論のユダヤ系アメリカ人への適用の可能性」、九州大学法政学会編『法政研究』70巻、4号、2004年、263-89頁.